●グローバル化時代の医療・検査事情 21

雲南の旅　その８
独龍（ドゥーロン）_2017年

岩本愛吉（いわもと あいきち）
Aikichi IWAMOTO

現代の地球科学は、大陸の移動やヒマラヤ、アルプスなどの造山運動をプレート・テクトニクスによって説明している[1]。4000 万年ほど前、インドプレートに乗っかったインド大陸が北上し、ユーラシア・プレートの下に潜り込んで押し始めた結果、海の底だったユーラシア大陸の南端が隆起し、プレートが 2 枚重ねとなってチベット高原が形成され、褶曲によってヒマラヤ山脈が形成された[2, 3]。おおよそ逆三角形をしたインド大陸が、底辺を使ってユーラシア大陸を持ち上げた結果、ヒマラヤやチベット高原は東西に広い。一方、地殻変動の東端にあたる雲南北西部からミャンマー北部は、逆三角形の右頂点（東端）で押し上げられる格好になり、南北方向の地殻の隆起になったようである。日本からインド西岸に位置するムンバイ（旧ボンベイ）へ向かう途中、筆者はこの辺りの地形を上空から見たことがある[4]。目標物が無く正確な位置は分からなかったが、雲南北西部からミャンマー北部あたりでは、山脈が南北方向に何本も走り、あたかも「大地の皺」の様相を呈していた。インド大陸の右端に押された地形が何故、何本もの褶曲山脈を形成したかという理由は知らないが、中国では四川盆地とチベットを東西に結ぶ道路を阻む何本もの山脈を総称して、横断山脈と呼んでいる（**図 1**）[5]。横断山脈を形成する山脈と山脈の間は急峻な峡谷となり、チベット高原を源流とする大河が流れる。怒江（ヌーチァン：サルウィン川）、瀾滄江（ランタンチァン：メコン川）、金沙江（チンシャーチァン：揚子江上流）が並行している雲南北西部は、「三江併流」としてユネスコ世界遺産（自然遺産）に登録されている[6]。実際には、独龍江（ドゥロンチァン：エーヤワディー川）も併流して四江併流となっているのだが、金沙江と瀾滄江の間には雲嶺山脈（最高地点：玉龍雪山 5,596m）、瀾滄江と怒江の間には怒山山脈（最高地点：梅里雪山主峰 6,740m）、怒江と独龍江の間には高黎貢山山脈（最高地点 5,128m）、独龍江とミャンマー国境の間には担当力卡（タタリカ）山脈（主峰 4,140m）が壁のように立ちはだかっているため、四大河を同時に見ることはできない（**図 1**）。

図 1　雲南の河川と山脈の概略図

本シリーズで扱った 5 河川名（独龍江、怒江、瀾滄江、金沙江、紅河）を□の囲み文字で、山脈名を○の囲み文字で示した。司馬遼太郎著 朝日文庫「街道をゆく 20 中国・蜀と雲南のみち」P.150 の図を参考に、雲南の地図上に山脈や河を作図した。
（https://ja.wikipedia.org/wiki/ 三江併流 #/media/ ファイル：China_Yunnan_location_map.svg）

東京大学名誉教授

Ⅰ. 広州から雲南へ

8 月 11 日、15 : 40 羽田発の中国南方航空で広州に飛んだ。中山大学の劉煥亮（リュウ・ファンリァン）教授が迎えによこしてくれた学生に空港でピックアップして貰い、泊まり慣れた陽光酒店にチェックインした。12 日早朝、ホテルに迎えに来てくれた劉さんと白雲国際空港から昆明に飛んだ。昆明長水国際空港では、雲南 CDC の李洪（リ・ホン）部長と莫冷鶴（モー・ランフゥー）さんの出迎えを受けた。ドライバーは 2013 年の瑞麗（ルイリ）、2015 年の河口（ハーコウ）行きでもお世話になった習（シー）さんだった。

15 : 00 昆明を出発。出発時の車のタコメーターは 118,888km。途中多少渋滞もあったが、約 300km の行程を約 2 時間半で走って大理に着いた。洱海（アーハイ）湖畔のレストランで李洪さんの同級生夫妻と夕食を取った後、漫湾大酒店（マンワン・ダーチュウティエン）にチェックインした。

Ⅱ. 怒江

8 月 13 日、8 : 00 ホテル出発。高速を西に走って、大理白族自治州（ダーリー・バイトゥー・ツチチョウ）と保山市（バオシャン・シー）との境界辺りの瀾滄江インターチェンジで高速を降り、一般道に入った。瀾滄江は、大河メコンの上流にあたる中国流域部分の名称である。チベット高原に源流を発し、雲南を縦断した後、ミャンマー・ラオス国境、タイ・ラオス国境、カンボジア、ベトナムを流域とする全長約 4,200km の国際河川である。筆者はこの川をカンボジア、ラオス（タイ国境）、雲南の 3 カ国で見たことになる。この辺りではまだ、国際大河メコンとしての貫禄を感じない泥流の印象だ。しばらく瀾滄江の傍を走って、怒江傈僳族自治州（ヌーチァン・リスツー・ツチチョウ）に入った。怒江傈僳族自治州は、雲南の最北西に位置する細長い自治州で、南から北へ瀘水市（ルーシュイ・シー）、蘭坪白族普米族自治県（ランピン・バイツー・プミツー・ツチシェン）、福貢県（フーゴンシェン）、貢山独龍族怒族（ゴンシャン・ドゥロンツー・ヌーツー）自治県の 1 市 1 県 2 自治県から成る [7]。州の西側はほぼ全て、約 450km にわたってミャンマーと国境を接し、北側はチベットとの省境となっている。

図 2　2017 年独龍への行程

★が宿泊した大理（8 月 12 日）、貢山（13 日、14 日）、六庫（15 日）、剣川（16 日）、昆明（17 日）。●は経由地。

怒江を渡り、怒江の西岸に入った。怒江に沿って北上を始めると、程なく高速道路の料金所のような検問所があった。一旦車を降りて説明していた李洪さんが、戻ってきた。筆者もパスポートを持って係官の面接を受けろ、ということらしい。李洪さんと一緒に検問ブースに入った。係官は厳しい表情の女性で、筆者のパスポートを見ながら李洪さんに質問した。この辺りまで来る日本人はきっと珍しいことだろう。面接を終え、車に戻って李洪さんに聞くと、係官は国境警備に当たっている武装警察だという。この辺りは、ミャンマー国境まで直線距離で 10km 強しかない。李洪さん達と一緒でなければ、なかなか説明が厳しいだろう。ここから貢山独龍族怒族自治県の中心、貢山まで約 200km、ほぼ一直線に伸びる単調な道を北上した。

途中、怒江脇のレストランで昼食を取った。劉さんがキッチンに入っていき、食材を選ぶ。李洪さんが筆者をレストランの裏側に案内した。そこには鉄製の矢倉が組まれており、李さんの背後から太い金属製のワイヤーが対岸に向かって伸びていた（**写真 1、左・中**）。流れは急で、川幅は 50m 近くあるものと思われた。矢倉には、バリスティックナイロン製のベルトが備えてあり（**写真 1、右**）、人々はこのベ

写真 1　矢倉に登った李洪さん（左）、河渡り用ワイヤー（中）、バリスティックナイロン製のベルト（右）。

ルトを着用してワイヤーと滑車（ジップライン）を使って怒江を渡るのだ[8]。中国を訪問するほとんどの日本人は、北京や上海など高級自動車が走り回る大都市しか見たことが無いだろうし、万里の長城など郊外まで足を伸ばすことがあっても、高速道路しか経験しないであろう。雲南のこの辺りでは、住民達が今日もジップラインを使って大河を渡る。今回の行程の間に実際渡っている姿を見ることは無かったが、小さな子供を抱えて怒江を渡る母親の姿がインターネットで配信されている[9]。

写真 2　貢山の地元料理

Ⅲ. 貢山

貢山独龍族怒族自治県の中心、貢山鎮には雲南CDCで最も小さいローカルCDCがある。陳静（チェン・チン）前所長は女性で、会う人ごとに声を掛け合うこの地域の名士のようだった。戴清草（ダイ・チンツァオ）所長は34歳の男性で、雲南CDCで最も若い所長とのことだった。前所長、現所長、若い所員2人が夕食に集まってくれた。大皿に盛り付けた地元料理が円テーブルの中心に置かれた（**写真 2**）。料理の中央は、小山のように穀物が盛り付けられ、バックウィート（Buckwheat、蕎麦の実）とのことだった。麺にして食べることが多い日本でも、お米に蕎麦の実を混ぜた雑穀炊き込みご飯やリゾットなど、水溶性食物繊維の摂取やダイエットのため、蕎麦の実レシピが相当流行しているようだ。2016年に訪れた大山包では、蒸かした蕎麦の実を食べたり、苦荞茶として味わった[10]。雲南周辺では思った以上に蕎麦の実が一般的のようだ。

蕎麦の実の小山の頂上には骨付きの豚肉、中腹にはゆで卵、トウモロコシ、鴨肉などが盛り付けられていた。小山の周辺では、手前が里芋、その右にサヤインゲン、その向こうには鶏肉。里芋のすぐ左はコンニャク。司馬遼太郎の「中国･蜀のみち」に「コンニャク問答」の項がある[11]。西暦300年頃（西晋時代）に書かれた漢文に、「蜀（四川）ではコンニャク（蒟蒻）を珍味とする」との記載があり、そのルーツを確かめようとしたらしい。結局、現在の中国では蒟蒻という漢語は使わず（蒟蒻の中国語発音はチールォー）、磨芋豆腐（モーイー・ドォフ）と呼ばれることは分かったが、四川で食することはできなかった。その後訪れた雲南で、コンニャク芋の栽培や食が盛んだと知ったとある[11]。筆者自身は、雲南で何度かコンニャクを食したことがある。コンニャクは磨芋ではなく、魔芋（中国語読みは同じくモーイー）と書くらしいが、日本のコンニャクと比較してざらざらとした食感や味は日本人の好みではないような気がする。「モーイーは、もういい」という感じである。司馬遼太郎に分からなかったのだから、「蒟蒻」の漢語がどうなったのかは、筆者は知る由もない。コンニャクの左隣はレンコン、奥の方にはサヤエンドウやジャガイモ、約40年前にこの地を旅した司馬遼太郎が書き記したように、日本の食文化の多くが揚子江流域、しいてはその最上流の雲南にルーツを持つ気がする。貢山鎮では三江明珠酒店に泊。

Ⅳ. 独龍江郷

8月14日、9：00にホテルを出発した。陳前所長も同行し、山間の峡谷を3時間ぶっ通しで車を飛ばした。雲南では悪路はしょっちゅうだが、今までで最も厳しい山道だった。あちこちで土砂崩れが発生しており、そのうちの1箇所は山側から道路に大量の土砂が崩れた直後だった。車高を少しでも高くするため、運転の習さんを残し、5人が車を降りた。それでも、少し腹をこすりながら、車は崩れた土砂の上をようやく通過した。途中、この山道にそぐわぬトンネルを通過した。2014年に完成した高黎貢山（ガオリーゴンシァン）トンネルだ。延長6.7kmで、笹子トンネルより約2km長い。高黎貢山トンネルができる前は、貢山から独龍江郷へは1日がかりで、11月頃から4月頃までは雪で閉ざされていたという。独龍江郷に住む独龍族（ドゥーロンツー）の健康管理を行う独龍江郷中心衛生院（独龍江郷中央保健センター）を訪問し、黎強（リー・チャン）院長から話を聞いた（**写真3**）。

独龍族は雲南でも最も少数の民族で、独龍江郷中央保健センターでは約4,000人の村人の健康管理を行っているという[12]。筆者の専門であるHIV感染者についても質問したが、これまで4人のHIV陽性者を診断し、1人は死亡したが、3人の治療を行っていると話していた。感染ルートは薬物使用とのことだった。

独龍江郷の標高は1,300m。8月でもあり寒くはなく、歩くと少し汗ばむ陽気だった。独龍江に架かる吊り橋を渡って、村のレストランで昼食を摂った（**写真4**）。独龍江は、ミャンマー中央を縦断する国際大河で、ミャンマーでの名称をエーヤワディー川、旧名イラワジ川という。独龍江はその上流で、雲南を走る流域を指す。その名の通り急激な濁流となって流れる怒江の水量もすごいが、独龍江の水量も半端ではない。驚くのはその透明度で、怒濤の流れは透明で、透けて見える川底は翡翠色である。恐らく急な流れが土砂を流れ去ってしまうのだろう。川の中で見えている石はどれも大きく、習さんが川面に出た石から石へと飛び移った（**写真5**）。

雲南は「蝶の王国」とも呼ばれ、蝶の宝庫である。チベットやミャンマーに近い高山から熱帯雨林気候の西双版納（シーシュアンバンナー）まで、多彩な気候で多種の蝶が生息する[13]。しかし、今回の独龍江河畔ほどさまざまな蝶が乱舞しているのを見たことはない。飛び回る10頭の中には、簡単に見分けのつくものだけでも5種類くらい別々の蝶がいる（**写真6**）。色とりどりで、どれもとても綺麗だ。命の尽きる前に子孫を残すため、どの蝶も必死で乱舞している。

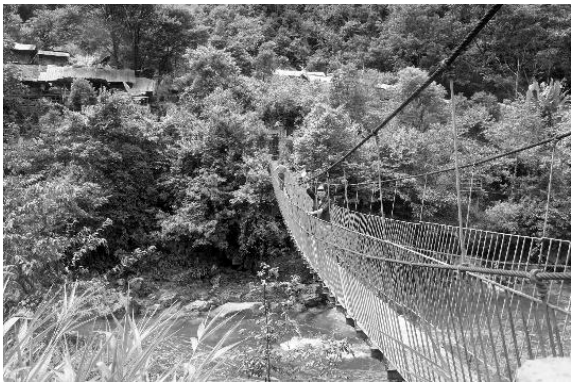

写真4　吊り橋を渡る劉さんと莫さん

写真3　独龍江郷中央保健センター。
筆者（右端）の左隣が黎強院長。

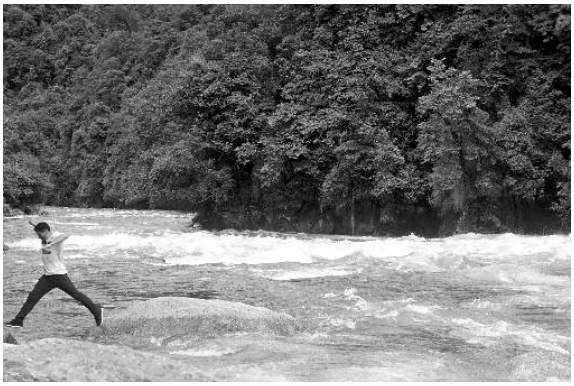

写真5　独龍江で石から石へ飛び移る習さん

写真 6　独龍江郷の蝶のうちの 2 種

15 時頃独龍江郷を出発したが、貢山に戻った頃には 18 時を回っていた。往路の土砂崩れの場所には複数の重機が来て、かなり修復が進んでいた。

V. 怒江流域：第 1 湾・桃花島・雾里村・石門

8 月 15 日午前 8：00、貢山三江明珠酒店を出発。陳前所長も同行してくれ、小雨の中を怒江の西岸に沿ってさらに上流に向かった。貢山からチベット州境までおよそ 50km の間に怒江は大きく 2 回湾曲している。下流からひとつ目を第一湾という。湾曲の中でサンショウウオの頭のように突き出た半島には、わずか数軒の家と周りの耕作地が見える（**写真 7**）。長い年月がかかるだろうが、この蛇行した部分が三日月湖になるのだろうか。第一湾を上流側に回り込むと 2 つ目の湾曲がある。道ばたの説明板によると、半島部分は 28 戸の怒族が住む桃花島で、こちらの半島には橋が架かっていた（**写真 8**）。別の説明板には、近隣の高黎貢山には白眉臂猿（白い眉と腕の長い黒い猿）やレッサーパンダなどの希少動物が生息するらしい。

さらに怒江西岸を北上すると、対岸には開墾したなだらかな斜面に点在する民家が見えた。雾里村（ウーリーツン）だ（**写真 9**）。まさに霧の中の村だ。のどかな景色で、なんとなくヨーロッパのような雰囲気を醸し出していた。60 戸の民家があり、チベット族、怒族、傈僳族が居住している。もうチベットとの省境まで約 20km に接近している。雲南とチベットの省境にある前人未踏の梅里雪山（メイリーシュエシャン、6,740m）まで、直線距離で約 25km だ。しかし、同じ雲南北西部に在って、チベットまでの距離感では似ている香格里拉（シャングリラ）と比

写真 7　怒江第一湾

写真 8　怒江の湾曲と桃花島

写真 9　怒江対岸の雾里村。

写真 10　石門の間を流れる怒江

写真 11　山頂付近の石月亮

較すると、この辺りでは遙かにチベットの影響が少ない[14]。香格里拉の方が主要な街道に位置し、遙かにチベットとの経済的､文化的交流が多いのだろう。

雨が強くなり、霧が深くなってきた。チベットへの省境を越えてみたい気持ちで、若干後ろ髪を引かれたが、この日は六庫鎮までかなりの長距離ドライブが予定されていたから、U ターンした。午前 10：45、雰里村でのタコメーターは 119,962km を指していた。昆明を出てからここまでの走行距離は 1,074km だ。

貢山に向かってしばらく走ると、渦を巻いて流れる怒江の両岸に巨大な岩壁が屹立していた（**写真 10**）。巨大な岩を怒江が削ったのか、岩を見つけて怒江が流路を造ったのか、その両方だったのかも知れない。しばし全員で雨の中に佇んで、絶壁と怒濤の流れに見入った。

Ⅵ. 石月亮・六庫鎮

貢山に戻って陳さんと昼食をとり、14：00 に出発した。六庫鎮に向かう途中、石月亮という景勝地に立ち寄った。大理石が侵食を受け、直径約 50m、高さ 60m、奥行き 100m の巨大な洞が山に穿たれているのだという[15]。雲が低くて見えなかったが、しばらく待っていると、雲が流れて 3 層の山並みの一番高い山の頂上付近に大きな穴が見えた。慌てて写真を撮ったが、焦点距離が短すぎて写真では見にくいかもしれない（**写真 11**）。ウェブでご覧になると、山頂付近の“月”がより分かりやすい[15]。石灰岩が地下で熱変性作用を受けて炭酸カルシウムが再結晶したものが大理石だというから、雨水に溶ける[16]。プレート・テクトニクスによって隆起した石灰岩層が、侵食されたものだろう。5 分くらいで再び、雲の中に消えてしまった。

貢山を出てから約 7 時間、六庫鎮手前のバーベキュー・レストランに滑り込んだ。21：00 を過ぎていた。李さんが少し手前で電話したので、帰宅せずに待っていてくれたそうだ｡温かい夕食を食べて、22：30 頃、瀘水市六庫鎮（ルーシュエシー・リューフェイチェン）の怒江大峡谷酒店にチェックインした。瀘水市は怒江傈僳族自治州の最南端に位置する県級市で、六庫鎮はその中心というだけにかなり大きな街だった。

Ⅶ. 剣川・沙溪鎮

8 月 16 日午前 9：00 にホテルを出発した。往路で通った検問所で、再び李洪さんと武装警察係官の検閲を受けた。多数の中国出入国スタンプが押された筆者のパスポートをめくりながら、男性の係官が厳しい表情で李さんに質問した｡改めて緊張したが、しばらくすると、往路で担当した女性係官が検問ブースに入ってきた。筆者の顔を見るなり、手を挙げてにっこり微笑んだ。彼女が声をかけると男性係官の表情が緩み、すぐにパスポートを返して通してくれた。

高速道路に入り、大理よりやや東にある小さな焼き鳥屋で昼食を食べた。何軒も同じような店が並んでいたが、その一つだけが異様に混んでいて、とても人気があるようだった。席が空くなり、前の人の後片付けが終わるのを待たずに座り込んだが、その甲斐のある美味しさだった。人間、西も東も“We do not eat to live, but live to eat”のようだ[17]。昼食後、高速に乗って北上し、剣川県（チィェンチュア

ンシェン）のホテルにチェックインした。剣川県は大理白族自治州の最北端に位置し、怒江傈僳族自治州の東端、蘭坪白族普米族（ランピン・バイツー・プミツー）自治県と麗江市玉龍納西族（リージャンシー・ユーロンナシツー）自治県に接している。

ホテルに荷物を置くとすぐに外出し、剣川県CDCの王正（ワン・ジョン）副所長と待ち合わせて、沙渓古鎮（シャーシーフーチェン）に向かった。沙渓古鎮は、普洱茶を運んだ茶馬古道の雲南・チベットルートの宿場として発展した[18]。10年ほど前からスイスの大学と連携し、水や古い家屋、町並みなど、環境保全に力を入れている他、ランドスケープ・ホテル（Land scape Hotel）という近代的なホテルがあり、大理市街にある系列ホテルとの間でシャトルバスを運行しているらしい。町並みを歩くと、道ばたの露店や古い家屋を現代風に改装して営業しているカフェがたくさんあった（**写真 12 ～ 16**）。

沙渓古鎮の周囲は平坦、川の流れは穏やかで山並みもなだらか、2014年に南アフリカ共和国ウェストケープのフランシュフック（Fransch-hoek）で宿泊したモーテル *La Cabrière* 周囲の風景が彷彿した[17]（**写真 17**）。王正さんの実家は村の中心にある薬局で、裏庭でたくさんの薬草を栽培していた。父親はこの辺りのかかりつけ医の役割もしているという（**写真 18**）。王正さんの兄は警察官で、二人ともすがすがしさのあるハンサム青年だった。沙渓古鎮を歩きながら、日本がこのような中国の農村の環境保護やゆったりとした再活性化に協力するよう心の中で祈った。

写真 12　沙渓古鎮の町並み

写真 13　古い家屋を改修したカフェ

写真 14　古い家屋を改修したカフェ

写真 15　古い家屋を改修したカフェ

写真 16　古い家屋を改修したカフェ

写真 17　沙渓古鎮周囲の風景

写真 18　薬局を経営する王正さんの実家

写真 19　剣川県 CDC

Ⅷ. 剣川県 CDC

8 月 17 日午前中に、王正さんの案内で剣川県 CDC を訪問した（**写真 19**）。剣川県の人口は 18 万人、CDC のスタッフは 24 人とのことだった。県内の HIV 感染者は年間 100 ～ 200 人くらい。検査を CDC が担当して、治療は病院で行うシステムらしい。病院でのスクリーニング検査が陽性になると剣川県 CDC で再検し、大理白族自治州 CDC で確認検査を行ったうえで、治療に入る。剣川の中心地の木工美術展にウィンドウショッピングのつもりで入ったら、劉さんと莫さんが数点購入した。その後昆明までドライブし、新紀元大酒店にチェックインした。この時点でのタコメーターは、121,166km、走行距離 2,278km だった。

8 月 18 日、李洪さんが空港まで送ってくれ、劉さんと広州に飛んだ。広州で劉さんの学生達と会食し、8 月 19 日に帰国した（**写真 20**）。

写真 20　劉さんと中山大学の学生達

文　　献

1）鎌田浩毅。地球の歴史（下）。中公新書。2016年。
2）大陸の衝突－ヒマラヤ山脈。「栃木県の地球科学（finding-geo.info）」。2020年3月21日閲覧。
https://finding-geo.info/world/Himaraya.html。
3）褶曲。ウィキペディア。2020年3月21日閲覧。
https://ja.wikipedia.org/wiki/褶曲。
4）航空マップ、成田（東京）－ムンバイ。2020年3月21日閲覧。

https://flyteam.jp/airline_route/nrt_bom/map
5）横断山脈。ウィキペディア。2020年3月21日閲覧。
https://ja.wikipedia.org/wiki/横断山脈。
6）三江併流。ウィキペディア。2020年3月21日閲覧。
https://ja.wikipedia.org/wiki/三江併流。
7）怒江リス族自治州。ウィキペディア。2020年3月21日閲覧。
https://ja.wikipedia.org/wiki/怒江リス族自治州。
8）ジップライン。ウィキペディア。2020年3月21日閲覧。
https://ja.wikipedia.org/wiki/ジップライン。
9）ジップラインを使った川渡り。2020年3月21日閲覧。
https://www.businessinsider.jp/post-168291
10）岩本愛吉。「グローバル化時代の医療・検査事情17　雲南の旅 その7 昭通_2016年」。モダンメディア 65(6): 9-18, 2019。
11）司馬遼太郎。「街道をゆく20中国・蜀と雲南のみち」。朝日文庫。
12）岩本愛吉。「グローバル化時代の医療・検査事情16　雲南の旅 その6 河口・普者黒_2015年」。モダンメディア 64(12): 11-19, 2018。
13）岩本愛吉。「グローバル化時代の医療・検査事情 12　雲南の旅 その3 西双版納_2012年」。モダンメディア 63(6): 13-18, 2017。
14）岩本愛吉。「グローバル化時代の医療・検査事情 11　雲南の旅 その2 シャングリラ(香格里拉)_2010年」。モダンメディア 63(5): 21-27, 2017。
15）石月亮。2020年3月21日閲覧。
https://travel.sina.com.cn/china/2009-05-25/104385553.shtml
16）石灰岩。ウィキペディア。2020年3月21日閲覧。
https://ja.wikipedia.org/wiki/石灰岩。
17）岩本愛吉。「グローバル化時代の医療・検査事情9　酒と心房細動」。モダンメディア 62(12): 11-16, 2016。
18）沙渓古鎮。2020年3月21日閲覧。
http://www.peoplechina.com.cn/zhuanti/2007-11/28/content_87667.htm